概要

動詞「あがる」と「のぼる」の用法における

学生の誤用分析

日本語の品詞分類は１０に分かれている。それは、動詞、形容詞、形容動詞、名詞、福祉、連体詞、接続詞、感動詞、助動詞、上司ということである。1 つの中に動詞である。ふつはインドネシア語中に、動詞は何にか状況を使うことがである。しかし、日本語の言語では、いくつかの言葉があるように聞こえる音声を別の言葉の意味は非常に似ている類義語ということである。類義語の使用が多いである。

この研究は「DESKRIPTIF」という方法を使用する。テストとインタービューという二つの研究の道具を使用し、テストが学習者の誤りにおける誤用形を知りに行い、インタービューが学習者の誤りにおける誤用系とその誤用に対する影響する要素を知りに行う。

研究のポプレーションとサンプレはインドネシア.コンピューター.大学の日本語学科の ２００６ー２００７学生の三年生で １０人である。データの収集の方法は文献調査で、あがるとのぼるを問題にしている。インタービューで用いる。

筆者は以上の解説に従って、次のように結論を述べる。

1　あがるを学習するには使用の誤用になると答えた学習者は25％である。

2．のぼるを学習するには使用の誤用になると答えた学習者は45，8％である。

3．学習者のあがるとのぼるの平均点が35，4%である。

インタービューによって、誤りにおける誤用は次の要素に原因される。内部の要素を学習するにはそれは困難、集中力の欠如の授業を受けている時点で考えられている素材は、自己のモチベーションの欠如。

外部の要素を学習するには施設やインフラの少ない完全な研究と、講師からの資料の説明の欠如。本研究の結果、学生生徒、リファレンスの源を探しては、文日本語の文章の多くは、研究と実践を読んで、たくさんの友人や講師の依頼を学ぶ方法の改善に期待することができる。